

流星の流れる頃に一翔び立つ戦士達ー 過去編 大切な友達と約束

イグナイトッド

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、流星の流れる頃にー翔び立つ戦士達ーの物語開始から9年前から描かれる始まりの物語。

少年と少女達は一体どんな夢を見続け、どんな真実を観ていくのだろうか。

そして、交わしていった約束とはなんなのか。

答えを求める戦いが始まる。

登場作品（現時点での確定作品）

ハートキャッチプリキュア

デート・ア・ライブ

俺、ツインテールになります

コードギアス反逆のルルーシュ

機動戦士ガンダムOO1st season

とある魔術の禁書目録

戦姫絶唱シンフォギア

テレビアニメ版ドラえもん

魔法少女リリカルなのはA，S

スーパージョウケンシリーズ

パワーレンジャーシリーズ

ソード・アート・オンライン

目次

第1章 やさしさにつつまれたなら

物語の始まり。	1
遊びのなかで	5
友達〜リインフォース〜	10
居候〜家族〜	15

第1章 やさしさにつつまれたなら 物語の始まり。

西暦2011年 プリキュア達が激しい戦いの末、姿を消した。

それは、残された家族達を悲しみに落とした。

「つまりそれは、……」

「ええ、どこを探しても見つかりません。

行方不明です。」

そう警察の特殊捜査本部の刑事と話すのは、消えたプリキュアに変身する少女達の母親の一人、花咲みずきであった。

「なんでこんなことに……あの子には、あの子には大切な家族が、最も大事にしているはずの妹がここにいるのに。」

「ですが、私達は諦めたりしませんよ。時間がかかってもいい、必ずや見つけます。」

「お願いします。必ず見つけてあげてください！」

「ええ、必ず！」

担当刑事である、トダカ警部はそう言った。

「大変ね……」

「うん、ふたばがいるからなおさらなの。」

来海えりかの母である、来海さくらと話す。

「ふたばちゃんかわいそうだよね、生まれて数ヶ月しか経ってないのにお姉ちゃんと離ればなれになるなんてね。」

「でも、前を向かないと。私が下を向いてると、ますますだめだから。」

「そうよね、下を向いてちゃダメだよ。」

家に帰り、ベビーベッドに寝るふたばを抱き抱える。

抱き上げてあげると、今まで我慢してきた涙が一気に溢れていた。

「ふたばごめんね、お姉ちゃんを探してあげられなくてごめんね。ごめんね、ごめんねごめんね……」

―数年後―

「おともだち〜おともだち〜みんなでなかよしおともだち〜」
あれからしばらくたち、ふたばは4歳になった。

今日は幼稚園の入園式であった。

「幼稚園楽しみ？お友達ができるのが楽しみ？」

「うん！ママ、おともだちできるのが楽しみ！」

入園式が終わり、これからの幼稚園生活を過ごす教室に戻ってきた。

楽しそうにしているふたばを見て、みずきはつばみの入園式を思い出していた。

（あの時のつばみは、人を怖がっていて全然遊びの輪に入って行けられなかったんだっけ。）

翌日、送り出されたあとふたばは早速他の園児達の輪に入って遊び始めた。

そこで遊びに加わらないで一人でお花を摘んで花冠を作っていたワンピースを着ていた長い髪の毛の子と、寂しそうに日陰にいたツインテールの女の子がいた。

ふたばはグループから抜け出して、二人の女の子の元へと走っていった。

「ねえ、どうしていつしよにあそばないの？」

「みんなであそぶより、ひとりでおはなをつんでいたほうがたのしいよ。だって、みんなといるとこわいし。」

「きみは？」

「わたしは、ひとりでいるのがすきな。なにかあったらいやだから。」

「ねえ、なまえはなんていうの？」

「かやまゆうか。」

「いつかことり。」

「わたしはねー、はなさきふたばっていうんだよー。」

「ふうん、なんでわたしたちにはなしかけたの？あそぶのはわたしい

「がいになればいいのに。」

琴里の問いに、ふたばは笑顔で答える。

「だって、ひとりよりたくさんであそんだほうがたのしいんだもん。それに、みんなともだちだから！」

「ともだち？」

「かつてにともだちって・・・」

「はなしてしまったら、そこでもうともだちだよ！」

「いいよ、なんかふたばちゃんとはなすとたのしいからいっしょにあそぶよ！」

「わかったよ、そこまでいうならあそぶよ！なんかはなしてるとほんとうにたのしくなるから。」

「うん！よろしくね！」

二人を連れてグループに戻ったふたばは、お迎えが来るまでたくさん遊んだ。

「じゃあね、バイバイ!!」

「バイバイ、ふたばちゃん。」

「またね、ふたばちゃん。」

琴里や優香に手を降ってさよならの挨拶をした。

「ふたば、お友達ができたの？」

「うん！できたよ！」

「よかったね、楽しかったよね！」

「うん！」

そう言いながら走っていたが、少しつまずいて転んでしまった。

「うっ、うううううう」

痛さに今にも泣き出してしまいそうになるふたば。

その時、小学生であろう子ども達らしき優しい声が聞こえた。

「あいか、あそこにたおれてる子がいるよ。」

「そうじ、たしかあそこの公園にいた子だよ。いつも遊んでたし。」

「たすけよう！」

小学一年生である、観束総二と津辺愛香が転んだふたばの元へと走って向かった。

「だいじょうぶ?」

「けがはない?」

「ぐすつ、うつ、うとうんだいじょうぶ。」

「ありがとう、おにいちゃんおねえちゃん!」

「ふたば大丈夫?」

「だいじょうぶだよ、ママ。」

「このおにいちゃんとおねえちゃんがたすけてくれたもん。」

「ふたばを助けてくれてありがとう。名前はなんていうの?」

「ぼくはみつかさそうじ、小学一年生です!」

「わたしはつべあいか、おなじく小学一年生です!」

「そうじくん、あいかちゃん。ありがとう。」

「今度お礼がしたいから、ここにきてくれないかな?」

「そう言いながら、みずきは家の住所が書いてある紙を二人に渡した。」

「ありがとうございます。今度いきます!」

「たのしみにしてます!」

「そう言いながら、二人は帰っていった。」

「おにいちゃん、おねえちゃん!じゃあね、バイバイ!!」

「よかったね、ふたば。また会いたいね。」

「うん!またあいたい!」

「そう言いながら、夕陽を背に帰っていったのだった。」

遊びのなかで

翌日、幼稚園に送り届けられたふたばは早速琴里と優香のところに行った。

「ごとりちゃん、ゆうかちゃんおはよう！」

「おはよう、ふたばちゃん！」

「おはよう、ふたばちゃん。きょうもげんきね。」

「きょうはなにしておそぶ？」

「おままごとがしたいな！」

「わたしはなんにでもいいよ」

「ようし、おままごとにしよう！」

そう言っておままごとの道具が置いてある箱の所に来たとき、

「ちよつとよろしくて?」、「ちよつとまちなさい！」

3人は声が聞こえた方向を向く。

そこには、明らかにフリルが付いた長めのワンピースを着た白金髪（プラチナブロンド）の女の子と、いかにもお嬢様っぽいスカートと上着をまとっていた黒い髪の女の子がそこにいた。

「えつと、きみたちはだれ？」

「わたくしのことを知らないですって?!」

「わたくしのことを知らないのは、つみですわ！」

「だから、なまえをいえていってるのよ！」

「おしえてくれないの？」

「わかりましたわ、とくべつにおしえてさしあげますわ。わたしのなまえはやまのかわまりあ（山ノ川真理亜）といいますわ！」

「わたくしのなまえはさわやませりな（佐和山芹那）ですわ！」

「へえー、まりあちゃんにせりなちゃんかあ。」

「どうしてわたしたちにはなしかけてきたの？」

「これからおままごとをしようとおもっていましたのよ。」

「はあ?!さきにおそぶうとしてたのはわたしたちのほうなんだけど！」

「かんけいありませんわ!おそぶのはわたくしたちですよ！」

「だったら、みんなでいっしょにあそべばいいんじゃないかな？」

「そうだよ、みんなであそべばとつてもたのしいよ！」

「ふたりがいうならなんだっていいわ。」

「くううう、もういいですわ！別のあそびをしましよ！」

「次こそ狙いますわ！」

「なんなんだよ、さっきのは。」

「きみは？」

「まりあとせりながいなくなったあと、ひとりの男の子が話しかけてきた。」

「おれは、かしわぎあらた（柏木新太）よろしく。」

「わたしははなさきふたばだよ」

「わたしはかやまゆうか、よろしくね。」

「いつかことり、よろしく。」

「よろしく。さっきながあつたのさ？」

「おままごとをやるうとしたらね、いきなりちよつとけんかになりそうだったの。」

「いっしょにあそべばいいのに、いじはってるのよ。」

「いっしょにあそべばいいのに。」

「ねえ、おれもおままごといっしょにやっていい？」

「うん、いいよ！」

「いがいね、おとこのこがおままごとをやるなんて。」

「でも、それが好きならそれでいいじゃないの。」

「そうだよ。じゃあ、あらたくんはパパやくね。」

「だれがママやくになるの？」

「じゃんけんできめればいいじゃない。」

「そっかー。さいしよはグー、じゃんけんポン！」

「じゃんけんの結果、ふたばがママ役になり、優香と琴里は子ども役となった。」

「くーっ！つまらないですわー！」

「ほんとうにつまらないですわね！」

真理亜と芹那は他の遊びを求めべく園庭に来ていた。

園庭では男の子を中心に遊んでいたが、もちろん女の子も混じって遊んでいた。

「あのおにごっこにいれてもらいましょー!」

「そうですわね!」

そう言つてそのグループに入れてもらおうとしたが。

「わるい、いまはもうはじまつてるから。」

そう言われて断られてしまった。

遊ぶあてが無くなり、寂しくブランコをこぐ二人。

「寂しいですわ……」

「悲しいですわ……」

楽しくおままごと遊びを楽しんでいたふたばだったが、

さつきから気になっていた事があつた。

それは、真理亜と芹那が二人でブランコに乗っていたことだった。

その目はとても寂しそうだった。

それを見たふたばは、靴を履いて園庭にかけていった。

「ねえねえ。」

「なつ、なんですの?!」

「いっしょにあそばない?」

「なつ、なにいつてるのですか?!」

「いっしょにおままごとをやらない?」

「あつ、あなたもうやってるではないのですか?!」

「そうですわ!わたしたちはほかにあそぶひとがいるのですよ!」

「だって、さつきからあそびにくわわれてなかったでしょ?」

「……それは……」

「ね?いっしょにあそぼ?いっしょにあそんだらたのしいよ!」

ふたばは二人に願うように頼む。

「……ごめん……なさい……」

「え?」

突然二人は目に大粒の涙をため、溢れんばかりの涙を大量に流しながら泣いた。

「さつきさつきしてくれたのに、ことわってしまつてごめんなさい……」

「わたくしたちがはなしかければふつうにいつしよにあそべるとおもってました。

でも、ほんとうはちがいました。ことわってしまったからしつぱいしてしまったのです。

なにもわかっていませんでした。ことわってしまったてごめんなさい……」

「それならだいじょうぶ！ちゃんみんなにはなせばだいじょうぶだよ!!」

「いいのですか?」

「うん!」

「そういえば、まだなまえをきいていませんでしたわ。」

「なんていいますの?」

「はなさきふたばだよ！よろしくね、まりあちゃん、せりなちゃん!」

「こちらこそよろしくおねがいますわ、ふたば!」

「なかよくしましょうね、ふたばちゃん!」

「あつ、どこにいつてたのよふたば!」

琴里は突然外へ出たふたばを問い詰めようとする。

「あ、なんであんたたちが……」

「ことりちゃん、いつしよにあそんであげて?おねがい!」

「さつきはとつぜんあんなことをしてごめんなさい!おねがいますわ!」

「わたしたちがあんなことをしてしまったのはとてもはんせいしてますわ!」

「ふ、ふたばのいうならしかたないわね!」

「ふたばちゃんすごい!ふたりのためにうごけるなんて!」

「へえ、すごいね。」

「へへへ。じゃあ、あらためてよろしくね、まりあちゃんにせりなちゃん!」

「うん、よろしくね。ふたばちゃん、ことりちゃん、ゆうかちゃん、あらたくん!」

「よにんとも、これからよろしくですわ!」

「そろそろきまつたら、さっそくあそぼう！」

6人は帰る時間までたくさんあそんでいた。

3人の新しい新しいお友達を迎え、楽しい幼稚園生活が進んでいくのだった。

友達くりにインフオースく

土曜日、6人は近くの高台にある公園で遊ぶことにした。

「おはよう、みんな!」

「おはよう、ふたばちゃん!」

「おはよう、ふたば。」

「おはようですわ!」

「おはようございますですわ!」

「おはよう、ふたば。」

土曜日の昼時、4月にしては気温が少し低めだったがそんなのは気にしないのがこの6人だ。

「なにしてあそぶ?」

「かくれんぼしよう!」

「一二三!」さいしよはグー、じゃんけんポン!」一二三!」

じゃんけんの結果、ふたばがおにになった。

「10かぞえるよー、いーち、にー、さーん、よーん、ごー、ろーく、しーち、はーち、きゅーう、じゅーう。もういいかい?」

「一二三!」もーいいよー。」「一二三!」

「よーし、さつがすよー!」

「ゆうかちゃんみつけ!」

「うわあ、みつかっちゃった。うまくかくれてただけだなー。」

「ことりちゃんもみつけ!」

「はやい、はやいわよ!」

「あらたくんみつけ!」

「はは、みつかっちゃったね!」

「まりあちゃんみつけ!」

「なっ、みつかってしまいましたわ!」

「せりなちゃんもみつけ!」

「なんとまあ、はやくみつかってしまいましたわね。」

「もう、みつかってしまるのがはやすぎますのよ。」

「だってえ、みんながどこにいたのかすぐにわかつちやったん

だもん！」

「まったく、みつけるのだけははやいんだから。」

「へへ、ありがとう！」

「ほめてない！」

「ねえ、あそこのかいだんのむこうへいってみようよ！」

「いいですわ！」

「いってみよう！」

6人は長い階段を上り、公園の頂上にあたる広場に来た。

「うわー、とつてもひろいねー。つて、ふたばちゃんなにやってるの？」

「なんかねー、ここにへんなえがかいてあるのー。」

ふたばが指を指した場所には、3つの3重の円に紋様が描かれた物が三角形を作り上げてあり、それを繋ぐように2本の太線が引かれていた。

「ほんとうにおおきいものですわね。」

「きつとなにかおきますわ！」

「だからさわらないほうがいいって……ちよつとふたば!？」

ふたばは興味をもつたらしく、その魔方陣の中央エリアにあったパズルをいじり始めた。

「こうしてこうして……やったあ、かんせいしたよ！」

パズルが完成してはしゃぐふたば。

その時だった。

《ズウウウウウウウン!!》

音と共に突然魔方陣が光だし、反応を起こし始めた。

光と音は大きくなり、一瞬辺りを見えなくさせた。

そしてそれは一瞬で消えた。

「だからやめろといったでしょ！」

「だいじょうぶかい？」

「よかったあ。」

「だいじょうぶならもんだいありませんわ。」

「だいじょうぶでよかったですわ。」

「ごめんねえ、みんな。」

そして6人は再び魔方陣の方向を向く。

そこでは驚くべき事が起こっていた。
なぜなら、

ほとんど自分達と身長が変わらない同い年であろう、銀髪の女の子が魔方陣の中央に横たわっており、その周辺に黄色いペンダントと羽のような物が散乱していたのだから。

驚く事に、その子は黒い露出度の高い服を身に付けているほかに何もつけていなかったのである。

「たいへんだあ、どうしよう!?!」

「とりあえず、はこばないと!」

「きのかげにはこびましよう!」

「はこんでからどうするのです?!」

「どうするって、めをさますのをまつしかないでしょ?」

「はやくはこぼう!」

銀髪の少女ーリインフォースは、とある空間の間に浮いていた。

(ここはどこだ?わたしはいつたい・・・あのとき、主はやてに別れのあいさつをしてわたしは消えた。

わたしはようやくこの苦しみからかいほうされて旅だったはず・・・あれ?おかしいな、わたし・・・だんだんこえがおさなくなってきたな・・・なんでだろう・・・おかしいな、あるじはやてのなまえはおぼえてるのにほかのようすがおもいだせない。こえがかんだかくなつていく・・・ほかのきおくも・・・なまえいがいの事がおもいだせなくなっちゃった・・・なんでわたしはここにいるのかな、ここからぬけだしたいよ・・・あれ、わたしにママとパパはいたのかな・・・だめ、なんにもおもいだせないよ。だれかたすけて・・・ここからきえたくないよ!こわいよお、はやくだれかたすけて・・・たすけてよ・・・こわいよお、こわいよお、こわいよお、どうなっちゃうの?)

《・・・ねえ、はやくめをさましてあげようよ・・・》

だれ?でもなんかあたたかいな・・・)

「あ、めをさましたよ！」
「う、ここは？わたしは……」
「だめですわ、あなたはけがをしてるかもしれないのですのよ！」
「そうですわよ！いまはよこになってない」と
「みんなのいうとおりだよ。」
「むりしたらどうするのよ！」
「ひどくなったらどうするのよ！」
「きみたちはだれ？ここはどこ？」
「ここはこうえんだよ！へんなさんかつけいのまんなかにあつたパズルをかんせいさせたらあなたがいたんだよ？」
「パズル？」
「きみのなまえはなんていうの？」
「わたしは……、リインフォース……」
「リインフォース？ながいなまえだから、リインちゃんと言でいい？」
「リインちゃん？」
「ねえ、どうしてないてるの？」
「わからないよ、きづいたらないてたの。」
「じゃ、なぐさめてあげる！よしよし、もうだいじょうぶだよ！」
「あれ、なんかあたたかいな……」
「へへ、もうだいじょうぶだよ！」
「うん、なんかげんきがでてきた。ねえ、なまえをおしえて？」
「わたしのなまえは、はなさきふたばだよ！」
「わたしはいつかことりよ。」
「かやまゆうかだよっ！」
「やまのかわまりあですわ！」
「さわやませりなといますわ。」
「かしわぎあらた、よろしくね。」
「うん！よろしくね！」
「リインちゃん、おうちはどこにあるの？」
「おうちはないの、わたしずっとひとりぼっちだったから……」

「じゃあ、おうちにおいで！ママがなんとかしてくれるよ！」

「え．．．？」

「だめ？」

「ありがとう、うれしいよ！」

「そうときまったら、はやくいこう！」

居候く家族く

リインフォースを連れてきた6人は、ふたばの家に戻ってきた。
「ただいま！」

「おかえりなさい。あら、みんなと一緒だったの？」

「うん！みんないっしょだよ！」

「」「」「」「」

「こんにちは！あら、新しい友達？」

見かけない子供を見つけたみずきは、ふたばに聞く。

「うん！リインちゃんというんだよ！はいつてきて！」

リインは、呼ばれたようにリビングに入ってくる。

「可愛いわね、ふたばと仲良くしてあげてね。」

「あのね、ママ。リインちゃんかえるがうちがないだって。ずっとひとりぼっちで、さびしかったんだって。だからおねがい！しばらくここにいさせてあげて!!なんでもするから、おねがい！わがままはぜったいいわないし、ママのいうことはきくから！だからおねがい！」

「だめよ、勝手に決めちゃだめだって前にあんなに言ったのに。」

「おねがい！なんでもするから、なんでもするからおねがい！」

「何があってもダメよ、あんなに言ったじゃない。」

「いやなの！ふたばさびしいもん、パパとママはいそがしくてくてもなんにもできないし、おねえちゃんがずっといないからさびしいの！」

「あ・・・」

「どうしておねえちゃんがないの?!みんなおねえちゃんとかいるのに、どうしてふたばのおねえちゃんかえってこないの?!いちどもあったこともはなしたこともないけど、たいせつなおねえちゃんがないのはとってもさびしいの！だから、おねがい！リインちゃんをここにいさせてあげて！」

ふたばは涙をぼろぼろ流しながら言った。

ふたばの涙の懇願にみずきは驚く。

「この子がそういうことを言うなんて、どうしたんだらう。ああ、これ

もあの子の色々なところを引き継いでるんだわ。何て私はバカだったのだろう。この子はずっとさびしかつたんだって何で気づかなかつたんだろう。」

「いいわよ。でもさつき言った事をちゃんと守るのよ。そして、あとでパパにはちゃんとお願ひしなさい。」

「ありがとうママ！ねえ、わたしのへやにきて！」

手を洗ってから、みんなを自分の部屋に連れていく。

ふたばの部屋は、2階の少し奥にある。

つぼみが使っていた部屋は鍵をかけられていたので、その少し奥のところにあった。

「うわあ、すごい！ぬいぐるみがいっぱい。」

「なかなかきれいなね。」

「ぬいぐるみのかずならわたしたちにはおよびませんけどね。」

「それがいいはすごいとおもいますけどね。」

「へえ、すごいね。」

「リインちゃん、これからわたしのふくをきてほしいの。」

「わたしが？」

「うん！ぜんぶわたしがえらんであげるから！じゃあ、みんなすこしへやのそとでまってる！」

「そとにだされてしまいましたわね。」

「でも、わたしたちがいうわけにはいかないからこれでよかつたかも。」

部屋からは、『これがいいんじゃないのかな。』『はずかしいよ……』

『だいじょうぶ！こわくないよ！』

といった声が聞こえていた。

「はいつていいよー！」

ふたばが部屋の中から声をかけてきたので、5人は部屋に戻る。

「これが、リインちゃんのアタらしいふくだよ！」

そこにいたのは、青い長袖の服に黒と白のスカートをはいて髪型をポニーテールにした、リインフォースだった。

「かわいいじゃん。」

全員がうなずいたいた。

「本当に？」

「ほんとうだよ！」

「あ、ありがとう。」

「じゃあね、またあした！」

「ま、またあした！」

みんなが帰ったので、ふたばとリインフォースは手を降って見送る。

こうして、リインフォースは花咲家の一員になった。